

## 日本労働年鑑 第24集 1952年版

The Labour Year Book of Japan 1952

## 第二部 労働運動

## 第二編 労働組合運動

## 第五章 失業者の闘争

一、概説 一九四九年には、自由労働者、失業者の闘争は最低賃金獲得、社会保障制度の実施の要求からさらに戦争反対、軍事基地化反対のスローガンを加えるものまで、次第に巾広い政治的内容をも含めた闘争に発展しつつあった。これが五〇年に入ると、上半期には失業者数は増大の一途をたどる一方、求人数は経済界の沈滞を反映して前年同期に比しても低い水準を示し、就職者数も減退するという失業者にとっては餓死寸前と見るも過言ではないような情勢を生み出したため、この年の日雇労働者・失業者の闘争が当初から緊迫した激しいものとなったのは当然といえる。

すなわち、六月、労働省発表になる「失業の実相」によれば、四月現在で完全失業者五〇万といわれ、これに半失業者、農村潜在失業人口、その他統計に現れないものを含めて全産業の完全・不完全失業者は優に一、八〇〇万にのぼると推定される。しかもこれらの中からその日の糧を求めて職安に集った日雇労働者は漸く確立されつつあった自由労働者の組織と相まって急速に革命化し、東京を始め全国各地の職安における日雇労働者の闘争は燎原の火の如く拡大し、しかも相次ぐ弾圧に流血の惨事すらひき起す激しい闘争となった。これが本年第一期の「職よこせ」の闘争であり、ついでこの闘争はいわゆる輪番制の採用によってアブレが激増するやいよいよ拍車をかけて尖鋭化した。

後半期に入ってレッド・パーージおよび企業合理化に伴う人員整理の結果、再び大量の労働者が労働市場に放出され、右の情勢はさらに悪化するかに思われたが、朝鮮の戦争による占領軍関係の求人が緊急需要としてその殆どが職安を通じて就職せしめられたこと、更にいわゆる特需景気による一部民間企業の労働力需要が同じく職安を通じて充足せしめられたこと、またこの戦争を契機にして当局の手による示威運動等の取締りの強化と労働運動一般の低調などに影響されてむしろ一時好転したかに見えた。しかしこの時期の特徴として日雇労働者・失業者の闘争は「戦争に導くレッド・パーージ反対」のスローガンの下にレッド・パーージによる被解雇者の求職闘争と結び労働組合その他の団体と提携して「平和のための仕事をよこせ」、「特需労務と称するドレイ労働反対」などを叫ぶ反戦平和の闘争が前面におしだされた。土建・日雇労働者を対象に発行されていた全日土建ならびに東京土建機関紙「じかたび」が他の労働組合機関紙に先んじて押収されるに至ったのもこの間の事情を物語っている。

年末における日雇労働者の闘争は、一般労働者の越年闘争とはやや性格を異にするものであり、その要求が一そう切実な内容をもったことは特筆するに足るであろう。以下本章では右のような本年度における闘争の流れに従ってその特徴的な動きをたどって見よう。

なお参考のため自由労働組合の組織状況、求職闘争の要求別・地域別一覧表を掲げる(第212表—第215表)。

日本労働年鑑 第24集 1952年版  
発行 1951年10月30日  
編著 法政大学大原社会問題研究所  
発行所 時事通信社  
2000年6月1日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1952年版(第24集)【目次】 次のページ→ ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---